第4章 防火・防災教育に係る検討

1 防火・防災教育における幼稚園・保育所等から家庭への波及効果

防火・防災教育の視点を考えた場合、最も大切な「火を出さない」という教育の一面と、 り災時、「どのようにして自分の身を守るか」、そのためには、子ども自身では判断できな いので「周りの大人の指示にどうやって従っていくか」という一面がある。

小学校高学年からの上の年齢や大人になると、危ないことについて伝えても、過小な捉えになってしまうことがあるが、小学校低学年や幼年期の子どもは、言葉通りに受け止めるので、その世代からの早期の指導というのは、重要と考えられる。併せて、子どもたちの安全を守るという視点以外に、防火・防災教育の取組みが家庭や地域に広がるという視点がある。大人に防火・防災について教えるということは難しいことではあるが、子どもに教えることができれば、子どもが家庭で話題にすることにより、子どもへの防火・防災教育が、間接的に家庭や地域への防火・防災教育につながることから大きな意味があると考える。

幼稚園・保育所等においては、避難訓練のあとに、「今日こういう風に訓練をしたよ、 『おはしも』(避難時の注意事項、「押さない」「走らない」「しゃべらない」「戻らない」

の頭文字)の話を家でもしてね」と子どもたちに伝えている。ただし、園児の親にとって、このことを年長では伝えられたとしても、年少は伝わらないことも多いので、「一緒に家庭で考えてみませんか」という物があれば、家庭における防火・防災に繋がっていくのではないかと考える。



2 視聴覚教材

(1) 視聴覚教材の有効性

子どもたちは、視覚に訴えることで、火遊びはいけないということが分かり易く、 分かれば、家でも話してくれる。ただし、子どもに教えるべきことが多岐に渡っている ので、何を教えるか、という所が重要で、優先順位を示す必要があると考える。 幼児に対する防火・防災教育の有効な手段を考えた場合、幼稚園・保育所等で避難 訓練時に消防隊を呼んで避難訓練を行い、その際に防火ビデオを園児に視聴させること が多く、好評でもあり、映像による防火・防災教育は有効であると考える。

視聴覚教材を作成する場合、火遊びをしないという火災予防の視点と、火災になったらどうするかという災害対応の視点があるが、3歳から5歳を対象とするのであれば、 火遊びは駄目だということが容易に分かるようにする必要がある。

また、子どもたちは、言われたことを守るし、素直に聞き入れる姿勢を持っており、 災害に対する恐れの気持ちを適度に持たせることは必要と考える。しかし、自分の身を 守るためには、冷静にならなくてはならず、ただ恐怖心を植え付けるような映像では、 園児が冷静になれず、注意が必要である。

映像を作成するのであれば、30分程度が園児にとって限度であり、10分程度が 妥当である。

視聴覚教材を作成する場合、子どもの興味を維持するために、1回の配布で終わりではなく、修正したり、盛り込む災害を変えたりして継続して更新し、5年に1度は更新することが望ましいと考える。

(2) 視聴覚教材の内容

実際の災害時での対応を教える場合、 頭で考えるのではなく、自分で動いてみ なくては、ここをどうしたらいいか、な どのひらめきがなく、それは子どもも同 じであると考えられる。

「いかにイメージができるか」とい うことがポイントになり、そういった面



でも視聴覚教材でイメージをし易くすることは非常に効果的である。しかし、幼稚園・保育所等において、避難訓練時などを利用して、火遊びはいけないということを子どもたちに伝えているが、子どもたちの想像力も個々に違うので、怖いというイメージだけの映像を作成すると、そこだけで終わってしまう子供もいる。「火遊びはやってはいけない。」ということを伝えるためには、恐怖心を煽るだけではなく、「火遊びをしたらどうなるのか」、「こうなった時にどうしたらいいか」ということにポイントを置いて視聴覚教材を作成すると、実際のイメージを持ちやすいものと考える。

視聴覚教材は、例えば、春、夏、秋、 冬編とか、火災編とか地震編とか、色々な バリエーションがあれば、使用しやすく、 札幌のイメージが湧くように、豊平川や藻 岩山が写るなど、札幌の特色が出ている物 があれば親近感を増すことができる。また、 冬の雪が積もった時に地震が起きたらど



うなるか、とか、夏は夏で火災が起きたらどうなるか、とか、大雨が降ったらどうなるかなど、様々なパターンが考えられる。逃げる方法や子どもを守る方法についてもその方法は多種多様であるので、そこは非常に重要である。

映像にどの災害を入れ込むかというのは、取捨選択が必要である。幼児期の子どもを対象とするので、淡々と進むような映像ではなく、キャラクターと音楽を組み合わせ、映像の本質に引き込ませるような演出が必要であると考える。

また、子どもが逃げるという想定の映像あれば、子どもの目線で作成しなくてはならない。子どもの目線の高さは、おおむね1mぐらいであり、子どもの視点に立った映像を作成すれば、よりリアルな物が作



成でき、子どもが感情移入しやすいと考えられる。仮に車が1台あったとしたら、子どもから見ると壁となり向こう側が見えない状況である。子どもの目線というのは、大人に比べ低く、また、私たちの想像よりもはるかに狭いものであることから、この点に配慮することによって、より子どもが理解しやすいものになると考えられる。

3 教育機関を対象としたマニュアル等の作成

(1) 指導者向け教育マニュアルの有効性

幼児が視聴覚教材を視聴するにあたり、視聴前の動機づけや視聴後の教育効果の確認などを行うことによって、より有効な防火・防災教育を行うことができる。

例えば、火災や地震が起きたらどうなるか、という話をし、幼児にイメージを持た せた後に視聴覚教材を見ると、より幼児の興味を増すことができる。また、見終わった 後に内容についての再確認を行うことによって、災害時の対応などをより一層、幼児の 記憶に残すことが可能となる。

そこで、視聴覚教材を効果的に活用するために、併せて「指導者向け教育マニュアル」を作成し、これに基づく視聴覚教材を使用した防火・防災教育を行うことにより効果がさらに向上するものと考えられる。

マニュアル作成にあたっては、視聴覚教材の活用についてのみならず、実際に火災 や地震が発生したときの対応マニュアルを併せて記載することにより、災害発生時の対 応についても、円滑に行うことができる。

災害について、発生に備える事前教育マニュアルと、災害発生時の対応マニュアル を併せて作成することにより、効果的な災害対応を図ることができるのである。

(2) 指導者向け教育マニュアルの内容

幼稚園・保育所等における実際の教育現場では、女性がメインの職場が多いので、女性目線、子ども目線のマニュアルを作成すべきであると考える。女性は、男性に比べ体も小さく、力も弱い、尚且つ、園によっては、一人で30人の子どもを見ている場合もある。よって、危機的状況になった時に、指導者が落ち着いてこの30人の幼児の命を守ることができるよう、どのようにすればパニックにならないで行動できるか、落ち着いて安全に行動できるか、ということがキーワードになるのではないかと考える。



そのような観点から、知識と行動の差異を無くして、指導者が幼児を誘導できるようにするマニュアル作りが必要である。記載されていることは分かるが、り災時にも記載されていることが思い浮かぶようなマニュアルを作成することが理想である。

幼稚園・保育所等の職員にとって、災害発生時、実際にどういったところで自分たちが戸惑うのか、ということが不安である。また、とっさの判断が求められるところで、事前の準備としてどこを確認すればいいか、こういう物が役立つということが分かるマニュアルを作成することが重要であると考える。

幼稚園・保育所等にとって最も大切なことは、災害が起きた時に確実に保護者に子

どもを渡すことである。そのためにはどのような手順をとったらいいのか、職員で話 し合っているが、イメージができないと難しいので、そういう面でも、事前に確認で きるものが良いと考える。

幼稚園・保育所等においても、災害発生時のマニュアルを作成しているところはあるが、女性や子ども目線の観点から整理されたものは、より一層良いと考える。

平成26年9月11日、札幌市内において、大雨の影響で避難勧告が発令された。 幸いにして、札幌市内で甚大な被害は発生しなかったが、いざという時に備え、対処できるということが重要である。例えば、低地にある、または高台にあるといったように幼稚園・保育所等が所在する場所によって、かなり違いがあるという観点から、それぞれの園に合ったマニュアルを作成できる仕組みづくりが必要である。